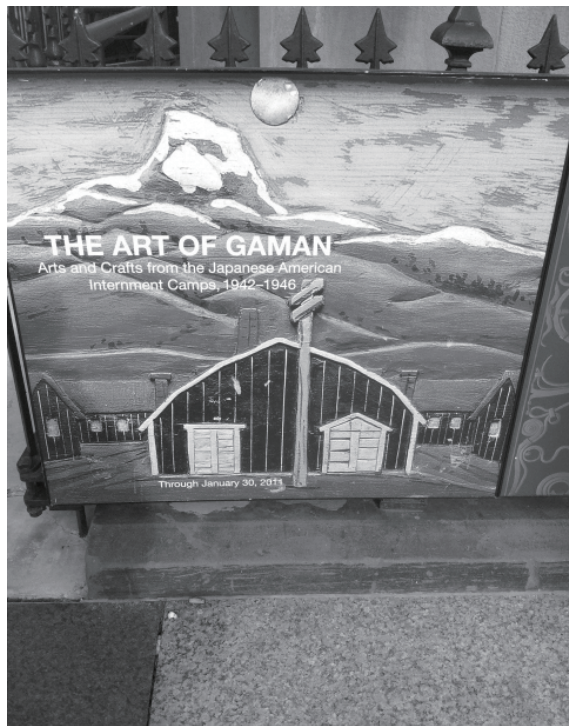


The Art of Gaman

新年の抱負を何にすれば良いか、私は毎年迷います。結局上手くできているかどうか分からない曖昧な決意になってしまうのですが、その源は自己欺まんかも知れません。ともあれ、今年の抱負を“我慢”としたいと思います。

アメリカ文化の中で育ちながら、時間を無駄にせず自分の言いたいことを言って、したいことをしてもよいと私は思ってきました。しかし、数年前から日本のことを色々知るようになり、その我慢強い文化の一部を尊敬し始めました。そのため、今年は自分をもっと我慢強い人に変身させようと思っています。

今年の抱負を“我慢”にしようとしたきっかけの一つは、1月末までRenwickギャラリーというホワイト・ハウスの近くにある小さな美術館で行われていたThe Art of Gaman



という美術展でした。そこには、第二次世界大戦の時に、ルーズベルト大統領が命じた捕虜収容所に住んでいた日本人や日系アメリカ人が創り出した芸術が展示されていました。生憎、写真を撮ってはいけないと言われたので、以下は言葉だけで説明させていただきたいと思います。

The Art of Gamanの芸術作品には、色々な種類がありました。絵画や彫刻といった一般的に考えられる芸術作品だけでなく、椅子やハサミもありました。通常、椅子などは芸術として解釈されませんが、この場合、収容所に散らばっていた木片や金属片を用いて作られた結果、少し変わった形をしている「普通」の物が特別な空気を生み出していました。

とりわけ、Akira Oyeさんがアーカンソー州の収容所で創造した小型の彫刻は、印象的でした。松の木とシェラックで形づくられた牛および熊の彫刻の明暗の対照は、私に、谷崎潤一郎の作品「陰影礼賛」をイメージさせました。小さいながら、影と光を弄ぶ質感が力強かったです。牛の尻尾は、まるで蠅を叩くように腿の辺に当たっています。熊は口を開けたまま、木製の坂道を登っています。二匹とも「動き」を象徴する傾斜姿勢で、収容所から出ていきたい捕虜の気持ちを表していたのかもしれません。

雨が降らず水が無いアーカンソー州の砂漠でも、生け花が出来ていました。しかしながら、その生け花は生花を使ったものではなく、ゴミ箱から取ったマヨネーズの瓶とカラフルなパイプクリーナーで創られて、命を注入された花です。不思議な感じがしますが、自由を奪われていたはずの捕虜が、シアーズ・デパートとかに注文して、パイプクリー

ナーミたいな商品を郵便でもらうことが当時できたのです。

イタリアでアメリカのために戦争に参加したGeorge Matsushitaさんのお母さんも、捕虜の一人でした。そのお母さんが、収容所でMatsushitaさんのために千人針を縫いました。その千人針がギャラリーの真ん中の大きなグラス・ケースの中に展示されていました。近づくと、一針一針の細部にお母さんの愛が込められていることが想像できましたが、おそらくそのお母さんの愛は私の想像を超えていたと思います。息子が恐ろしい戦場でアメリカのために命をかけている時に、お母さんは同じアメリカに裏切られて乾ききった土地の檻のような収容所で暮らすことになった状態は、その母子に複雑な感情を引き起こしたに違いありません。

第二次世界大戦は、アメリカに住む日系人にも生きることで死ぬことの違いを考えさせました。ギャラリーには複数の仏壇も並べられていて、木片や金属片を使い死亡した大切

な者のために記念品を綺麗に創った当時の捕虜日系人の気持ちが、残響のように私に伝わってきました。

The Art of Gamanの作品数は思った以上に多かったです。小さな作品としては指輪もいくつか並んでいました。特に、カリフォルニア州のSanta Anitaという競馬場にあった収容所に暮らしていたRobert Uedaさんが、モモの種で創った指輪は、甚だ手が込んでいて綺麗でした。その指輪の下の説明によると、捕虜がモモなどの種を風呂まで持って行き、シャワーのコンクリート床でこすってツルツルにしてから、細かいデザインを刻み込んだそうです。

こんな風にして、当時の捕虜は、もどかしい気持ちを芸術へと昇華したのです。檻の中に住みながら芸術を鎧のようにまもって実現された“我慢”は、私の見当が付かない程度であったことでしょう。

1988年にアメリカ政府が発行した謝罪文にあるように、収容所は差別と戦争ヒステリーに基づくものでした。死の恐怖の下でもがいている状態では、もちろん誰でも過ちをする恐れがありますが、アメリカ人の一人として私は、あの時のルーズベルト大統領の行為を愚かにしか思えません。しかし、当時の捕虜は、その愚かしさにふさぎ込んだりせずに“我慢”を通したのです。彼らが残した作品を通じて、彼らは私に“我慢”の徳を教えてくださいました。



筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学 (DC) で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町 (現在三豊市) の国際交流協会で一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ蜚が身を焦がす」。